

タイトル		The Gift of Nothing			
著者（文・絵）		Patrick McDonnell			
出版年		2005 年	出版社	Little, Brown and Company	
翻訳版		『おくりものはナンニモナイ』 谷川俊太郎訳、あすなろ書房、2005 年			
総語数	287 語	ページ数	53 ページ	YL レベル	1.0
あらすじ					
クリスマスのことです。猫の Mooch は、親友の犬 Earl に贈り物をあげようと考えます。でも、何でも持っている Earl に何をあげたらよいのでしょうか。考えに考えて思いついたのは nothing！これを思いついたものの、世の中はたくさんの物で満ち溢れていて、どこで nothing をみつけたらよいのでしょうか。お店に行っても探せません。家に戻って諦めつつ、ただ座っていると“<i>And not looking for it, he (Mooch) found nothing.</i>” さあ、nothing を箱詰めしなくては。Mooch は何にも入っていない箱にリボンをかけてプレゼントします。Earl は喜んでくれるのでしょうか。					
紹介					
パトリック・マクドネル (1956～) は、アメリカ、ニュージャージー出身の漫画家、絵本作家、作家、劇作家です。人気コミック <i>MUTTS</i> は多くの賞を得ています。本作 <i>The Gift of Nothing</i> は <i>The New York Times</i> bestseller となりました。ともに、犬の Earl、猫の Mooch が主人公です。 雪降るクリスマスの光景が最初のページに描かれています。絵本全体も雪を思わせる白いページで、その上部にごく短い文章が、下部には白黒赤のみで描かれた小さな絵が添えられています。ごく簡素な文章と絵が、余白の世界を感じさせますが、余白でありながら何か豊かなものを内包しているように思われます。Mooch が贈り物のために探す“nothing”も空虚なものではなく、暖かく豊かな何かがあります。何もないのに何かがある。それは何なのか。まるで禅問答のようです。絵本の背表紙には、以下のコメントが載っています。 “A sweet tale with a Zen message.”—<i>People</i>（アメリカの雑誌） Mooch と Earl のやりとりは心温まるもので、正方形に近い愛らしい本は、優しい気持ちになりたい時に、そっと開いてみたくなります。また、Mooch のように大切な人に贈り物をしたくなった時に、この本を選びたくなる魅力があります。					
指導ポイント・授業活用例・学生の声など					
字数も文章も少ない本です。必要に応じて、everything, something, nothing を確認しましょう。					

※本文中には、“通常複数にならない something に s がついているインフォーマルな使い方の文章があります。

“But in this world filled with so many somethings, where could he find nothing?”

この本を使って何かアクティビティーを行うよりも、一人ひとりが Mooch と Earl の世界に浸る読書の時間を持つことをお勧めします。年末最後の授業で、先生方から「読書の時間」をプレゼントしてみたいかでしょうか。読後に谷川俊太郎訳の日本語版を読むのも味わい深いでしょう。

以下のクリスマスをテーマにした作品を併せて読み、「クリスマス」や「贈り物」の本質を考えてみるのもよいでしょう。学生の英語力に合わせた retold 版の多読図書がさまざまな出版社やシリーズから出ています。

- Hans Christian Andersen. (1845). *Match Selling Girl*. (『マッチ売りの少女』)
- O. Henry. (1905). *The Gifts of Magi*. (『賢者の贈り物』)
- Charles John Huffam Dickens. (1843). *A Christmas Carol*. (『クリスマスキャロル』)

関連作品・参考 URL

作者に関しては、以下のサイトで紹介されているプロフィールをご覧ください。

<https://mutts.com/about-patrick/#>

(文責：草薙優加)